

フランス＝インター（ラジオ局）、朝のニュース番組の1コーナー

ソニア・デュヴィエ（司会者）：

激しく徹底した討論が今週繰り広げられました。そのまとめを、アナエル・ルボヴィッチ＝ケエネンさんとフランク・ラムスさんと共にお送りします。

今日は。アナエル・ルボヴィッチさん。あなたは精神分析家で ECF（フランスのラカン派分析家団体）のトップです。フランク・ラムスさん、あなたは CNRS とエコールノルマルで認知科学の研究をなさっています。

アナエルさんからまず話してもらえますか。討論の枠組みを与えてください。精神分析のキャビネにひとが向かうとき、寝椅子に横たわったりとか、肘掛椅子に座ったりするのでしょうか、セッションは保険で払われませんか。それは精神分析が公的資金を享受していないことを意味していないのでしょうか。どういう枠組みで分析は行われるのでしょうか。

アナエル：そうですね。精神分析そのものは、決して公的資金にはあずかっていません。保険適応があるのは、たとえば心理士たちの場合です。それは「私のプシ」という制度にかかわる場合で、精神分析的な理論により導かれていています。心理士という資格で、利用する患者の保険をつかって、12 回分のセッションの支払いを受けることができます。

ソニア：しかしそれが精神分析家の場合もありますか？CMP とか CMPP といった、医療心理的センターで働く人たちのことです。

アナエル：精神分析家としては、ぜったいにありません。つまり、精神分析家は心理士としても働くことが可能です。精神分析家が精神科医のこともあるし、精神分析に興味をもつ教育家たちもいます。精神分析に興味をもつ看護師たちもいます。ですからじっさいには、非常に多くの者がいて、精神分析の理論を参照しながらメンタルヘルス領域で働いています。

ソニア：それはたしかに極端なまでに振り分けることが難しいと思いますね。もし振り分けないとならなければですけど。

あなたは精神分析というあなたの学問に対するこのような政治的な攻撃に、いきなりさらされました。あなたは刀で殴りに来られたと感じますか？

アナエル：えっと、規則的に攻撃というものはなされてきていて、この素晴らしい学問の信用を失墜させようという試みがあるものです。しかしながら、確かにこんな修正案には啞然とさせられます。1世紀以上もつづくひとつの実践を、たった数行で根こそぎにする主張がされています。たしか有効性があるのに、何らかの研究、科学的研究とかがどうのと書かれていて・・・。そうですね、心的障害の統合というものについて扱うものであるのですからなおさら、修正法案は啞然とさせられるものでした。

ソニア：フランク・ラムスさん、あなたとしては、この討論がよい問いを提示したとお考えでしょうか。この修正案は結局撤回されたのですが、そうだとしてもよい問いだったのでしょうか？あなたにとって完全に正当性をもつ討論を呼び起こしたとお考えでしょうか？

ラムス：そのとおりです。修正法案はまったく正当な問いを提示したよいものだったと・・・つまり、どういう条件で、ケアは保険適用されることが可能なのか？決して有効性の証拠が示されないようなケアは支払われるべきなのか、最低限の有効性が必要なのか、ほかのタイプのサイコセラピーはどうなのか？といった問いです。

ソニア：そうなのですね。公的なたくさんレポートのなかで強調しているのは、有効性の証明を欠くとか、不適合な性格、さらには精神分析的アプローチの反生産的な性格といったものです。予算には限りがある、という文脈のなかでなら、あきらめるというその主張には正当性がある、と、ほぼあなたは言っていますよね。

ラムス：まったくそのとおりです。数年前にホメオパシーにたいして起こったのとおなじことです。

ソニア：ホメオパシーですか？

ラムス：そうです。AHAS が調べて、保険適用が取り消されましたが、それは完全に正当なものでした。

ソニア：その点でほとんどホメオパシーと同じ道をたどっています。ホメオパシーは、20年から30年前でしたか？討論が当時起きていて、それはプラシーボ効果によるのだとよく

言われていましたよね。

ラムズ：いえ、10年前のことです。精神分析もまたプラシーボ効果であるということを、そのことは排除していません。スタンダードなサイコセラピーを受けた患者のコントロール・グループと比較したのですが、そのことがほとんど観察されましたよ。

ソニア：アナエルに聞きます。精神分析とはプラシーボ効果なのですか？

アナエル：私はプラシーボ効果だとは思いません。私たちを苦しませるものについてひとが語る時、しかもそれは誰に対しても語るわけではありませんが—というのは結局、友人や祖母、大叔父さんなどにもひとは苦しませているものについて話せるからです—、偏見をもたずに聞いてくれるひと、しかも、わたしたちのパロールを引き起こしてくれるひとに語っています。つまり、現在私たちを苦しませているものを発見できるひとに向かって語ります。

現在に介入している過去の出来事といったものがあって、触れるに至ります。そうしてひとは具合がよくなったりします。ラムズさんにさきほど話したのですが、ひとがセッションを卒業するときは具合が良くなっています。そしてセッションを始める時、それは具合が悪い時です。ですから私はプラシーボ効果であるとは思いません。「言うことができたこと」に因るものと思っています。

ソニア：問い直されているのは、精神分析の科学性とその有効性です。あなたはあらゆる形式の評価を、精神分析的な治療に適用することを拒むのでしょうか？

アナエル：精神分析的治療は、そのものとしては、誰もが有効性に興味をもつとは思いません。しかし公的資金がかかわる場合には、なにが起きているのか評価することができるのは、自明のことだと思います。たとえば精神分析によって方向づけられている心理士たちが働くサービス機関のことです。そこでは精神科医が評価されていますね。科学的研究は、同党の有効性があると示しています。

ソニア：フランク・ラムズさんは賛成でないようですが・・・

アナエル：フランク・ラムスさんは賛成ではないですね。この討論の向こうで、こう言ってよければ専門家たちの討論の向こうで、私が思うには各自の主体性について語るということが・・。ほっとします。私には何において脳神経学的、あるいは仮定的に脳神経学的障害に診断をくださるのかわかりません。それが誰であれ、別の誰かに向かうことを妨げてしまうでしょう。主体性は考慮されるべきだと思うのですが。

ソニア：みなさんがよく理解できるように、つまり脳神経学的障害は、医学的なものの側にある、精神医学の側にあると、それでよいですか？じつのところ、私の考えでは・・。つまり、あなたが述べたことは、ケアの補完性、アプローチの補完性を妨げている、ということですね。

アナエル：私たちの主体性が考慮されるやいなや、偏見なしに受け入れられることで、ひとは話すことが可能になり、具合が良くなっていくのはまったく自明のことであると思われま。それは確認できることですし、プラシーボによるものではありません。

ソニア：フランク・ラムスさん、あなたにとっては十分な科学的コンセンサスがあるとのことですね。精神分析はなんの役にも立たない、うまくいかない、自分のお金でそれをしたい人たちにはよいのだろうが、と。

ラムス：ルボヴィッチさんが有効性を示した研究があると主張していますが、じつは彼女が語っているのはべつのことの研究です。それはサイコダイナミックセラピーというもので、精神分析にインスパイアされたものですが、かなり異なるもので、実践は完全に変わっていますし、精神分析のケアのタイプとは何の関係もありません。フランスでなされている精神分析のケア、医療心理教育的センターや医療心理センターで子供たちに提案される治療と、サイコダイナミックセラピーは、何の関係もありませんよ。

ソニア：あなたは子どもたちにそういうセンターで治療がなされることを非難しているのですか？

ラムス：それはまず、治療ではないということです。CMPにおいて、数か月もの待ちリストがありますし、さらに数年にわたるリストもあるのを私は思い出します。面談をするのに二

年待つ大人たちがいるのです。

ソニア：そうだとすると、あなたは彼らの何を非難しているのでしょうか？

ラムス：子供たちの家族のアソシエーションが存在していて、十何万という家族がいて、その人たちは修正法案への支持を公にしていましたよ。というのは、その家族はもう何年も CMPP のなかで見てもらうことができなくて、診断ももらえず、適切な責任も果たしてもらえず、もらえる情報もないのですからね。

アナエル：あなたはフランク。ラムスさんを語るままにさせるのですか？

ラムス：だからその人たちが出るときだけは、それらの施設を出ることができるとき、診断をもらい、適切な治療を受けたとき、もうそのことを家族は恨まないのです。

ソニア：あなたはそれらの医療心理的センターがなんだと言いたいのですか？精神分析家たちの指標であると？

ラムス：CMPP はそうです。精神分析のまわりに打ち立てられました。

ソニア：わかりました。

アナエル：でもフランスの精神医学全体が精神分析のまわりに打ち立てられたのですよ。CMPP だけではありませんよ。

ソニア：でもそれは、フランク・ラムスが言ったことをそれでもやはり理解したいと思うからお話ししますが、それは家族たちが苦しみのなかに置き去りにされていることを意味しています。子どもたちとか、大人たちとか、ちゃんと見てもらえていない人たちがいて、診断をもらえずにいる、ということですね。そして精神分析というのは大雑把にいて、その身内であることを意味しています。誰が何年も失っているのですか？

行動主義のプシや精神科医たちに会いに行く前に？何年も失うということですか？私にはよくわからないのですが。

ラムス：まったくそのとおりです。私が言っているのはそれで、数多くの家族がそのことを証言しています。私のブログを読んでもらえれば分かります。ほかに多くの場所があるので。

ソニア：ラムスさんは精神分析の信頼を失墜させるひとたちとその証言の多くのケースを扱っていますが、私は異議を唱えます。というのは、彼らはその証言に科学的な評価をしていませんでした。それらの証言とは逆に、精神分析あるいはその方向性にたいして賛成を投じている人たちのケースは、ラムスさんはひとつも扱っていません。なぜならもう一度繰り返しますが、それはひとつの方向性というだけなのです。CMP で患者を受け入れる人たちは精神分析家ではありません。または、結局のところそのものとしては精神分析家ではないのです。彼らは心理士たちであり、精神科医であるのです。その人たちは何らかの形でやってきた人たちを方向づけ、援助するのです。

ソニア：あなたは修正案は適用される場合には、今週討論したように、それはほとんど魔女狩りであると思うわけですね。

アナエル：一方では、魔女狩りです。公共の健康というものにたいして重大な問題を提示すると思います。もしひとの話を聞くことをあきらめて、スタンダードな再教育メソッドを提案するならば、もしただちにそんなことをするならば・・・というのはそこで起きていることは何なのでしょう？

もし精神分析への参照が消失されるなら、ひとはスタンダードな再教育メソッドを提案することになるでしょう。そうです、だから私はそれが起きることだと思います。行為への移行があるでしょう。というのは各自は知っています・・・行為への移行とは何でしょうか？

ソニア：自殺の危険とか？

アナエル：それだけではないです、自殺の危険だけではないです。私に起きたことですが、まだ若くて心理士として働いていた時に男性患者が来ました。彼は部屋に入ると「妻を殺すつもりだ、そのあとで自分は自殺する」と言いました。もちろん、私は言いましたよ。指示

をしました。病院はあそこだとか、色々。でも彼は理解しようとしませんでした。それで私は彼に何が起きたのか理解しようと、時間をかけることにしました。1時間一緒にいました。もしフロイト理論への参照を私がもっていなかったなら、私はどうしたらいいか分からなかったでしょう。彼にどう話をさせるかもわからなかったと思います。最後に彼は話をして、誰も殺さず、入院することになりました。それは偶然であると言うこともできますが、理論的な指標の真の参照が存在していると、言うこともできます。

ソニア：入院した、つまりあなたはCMPとプシあるいは・・・CMPだけがあるわけではなく、ここではCMPのことしか話題にしていけないので言うのですが、精神病院というものも存在しますし、デイケアなどもあります。私たちが話題にしているのはメンタルヘルス領域全体のことですよ。

アナエルさんはだから、精神分析家たちは入院や瞑想を処方することにも扉を閉ざしていない、と言っているのですよね。

・・・ふたりが同時に話す・・・

アナエル：診断たとえばTND（神経発達障害）という診断ですら、必要なひとたちには診断をくださいものですよ。フランク・ラムスさん。

ラムス：いろいろな方向で証言を積み重ねられることができますね。

ソニア：でもラムスさん、あなたも、行為への移行のリスクについて警告していますよね？

ラムス：もちろんです。そういう人は存在しますから。それはそうとして、ルボヴィッチさんがひとつお話をしてくれましたが、それはひとつの話にすぎません。

ソニア：それはひとりの実践家による経験ですよ？

ラムス：彼女はほかの方向性をもつ治療者とは違うのだと信じ込ませようとしていますが、ほとんどそんなことはありません。あなたが主張するようには、ほかのセラピーはスタンダード化されていません。すべての治療者は患者のことを聞き、受け入れ、話を聞いて、その状況を理解します。そしてそのあと、セラピーが差異をあらわします。患者と何をするのか、その人生を改善しようとするのどのように努力しようか・・・などです、具体的に言うと。

アナエル：ラムスさん、あなた自身が今言っていますよ。すべての治療者が患者を聞くことから始める、と。それは精神分析のおかげなのです。患者を聞くことから始めようと言ったのは精神分析なのです。申し訳ありませんが、はじめりはそこからだったのですよ。ですからもし修正法案を適応しなければならないなら、患者に耳を傾けているひとたちを禁止しなければならないでしょう。そこまで行くでしょうね。

ソニア：最後に、です。もうお別れしなければなりませんから。今年いっしょに再討論したことなのですが、というのはこの討論はまったく素晴らしいもので、それはよく聞かれます。戦争が再びはじまり、だからひとはそれがどこへ連れていくのかを知りたがっています。最後に、アナエルさんとラムスさん、それはイデオロギー的転換だと思いませんか？時が変わるというのは？

アナエル：まったくそうです。イデオロギー的な転換です。私がいいたいのは、それを最もよく表す証拠というのが、「憎しみの用語」であり、その用語において、この修正法案は作られました。

ソニア：「憎しみの」というのは、精神分析への憎しみ？

アナエル：そうです。それは憎しみです。このような参照を突然禁じることが起こるということが私にはわかりません。もしひどい憎しみが存在しないならば、そして精神分析を根こそぎにしようという決然とした憎しみがなければ、説明できません。

ソニア：ラムスさんにとっては、イデオロギー的な運動でしょうか。科学的な運動でしょうか。

ラムス：私は逆だと言いたいです。それは反イデオロギーの運動であり、精神分析はひとつのイデオロギーです。そして私の考えは、むしろ、プラグマティックな考えに基づくケアを打ち立てることにあり、うまく行っているものを評価するという考えに基づくケアを打ち立てることにあります。

ソニア：おふたりののおかげで、来るべき日に備えて、種まきをすることができました。みなさんありがとうございました。